



見るもの、聞くもの、出会う人...全てが自分の刺激となり、篆刻の作品へのイメージ作りにつながります。だからいろいろな体験をしたいのです。

たった一度の自分の人生に 自分の手で色々なことを 引き起こし続けたい

ごんだしゅんいち いつろ
権田 瞬一(逸盧)さん
(18歳で日展入選を誇る篆刻作家)

HITO

「技術だけでなく心や人間性が磨かれていないと、真に訴える作品にはならないと思います。」と語るのは、18歳で日展に初入選し、2年後に2回目の入選という快挙をなし遂げた、篆刻の新鋭作家・権田逸盧さん。まだ22歳の大学生ですが、先ごろ、文化功労者に選ばれた、小林斗盦先生のもとで、篆刻界の将来を担う作家となるべく勉強中です。



「今自分らしさを出すよりも、伝統を重んじ、古典を学びながら基礎を身につける期間だと考えています。何ともそつだと思いますが、基礎がしっかりしていなければ、その上に何かを積み上げることができません。いつか『ああ、これは権田の作品だ。いい作品を作るね。』と言ってもらえるようになりたいです。そしてこれは本当におこがましいですけど、若い人材が少ない篆刻界で、何かを引き起こすことができたらいいですね」と、将来の決意も語ってくださいました。

「篆刻との出会いは、6月に人生の転機が訪れます。たまたま作品を持つて出かけた展覧会で小林斗盦先生に偶然会ったのです。後で悔いが残らないように、迷わず声をかけました。そして作品を見ていただいたんです。」これがきっかけとなり、小林先生に弟子入りしました。周りの友だちはもっと遊んでいませんか、と尋ねると、「遊ぶときはとことん遊ぶけれど、それに流されてしまわないよう、メリハリを付けることを心がけています。また、スポーツが大好きなので、体を動かしたり、さまざまな体験を通して常に新しい刺激を求めながら創作意欲へつなげています。」と明るく答えます。篆刻について何ごと

植物・生き物 / しょくぶつ・いきもの



撮影...県生態系保護協会狭山支部・矢内昭夫さん(水野)

全長約18・5cm。ツバメより少し大きく、額・頭から尾と翼上面は青色の光沢がある黒色で、腰は赤茶色、細い黒色の縦斑があります。日本には東南アジア、中国南部などで越冬したものが、夏鳥として3月下旬から4月下旬に主に本州より南に渡来します。集団で軒下、橋桁や倉庫の天井などに、土と枯れ草を使って徳利を縦に割った形の巣を造り、繁殖します。ジュジュと濁った声を出し、チクチエチ・チビユチユチ・チイーチイーとツバメに似たさえずりをします。営巣する巣の形から、トックリツバメと呼ばれることもあります。

さやまの生態系
コシアカツバメ
(スズメツバメ科)

Vol 52